

# 口承文芸の調査・記録・活用・保存

花部英雄

はじめに

高度成長を迎えた日本が、経済や産業構造の変化に伴い、それまでの農山村を大きく変えていったことは改めて言うまでもないことである。それによつて地域社会と密接にかかわる民俗の変容はもちろんあるが、ある程度個人的領域に属すると思われる口承文芸の世界においても確実に変化していった。

高度成長期が去りバブルも崩壊して後、気がつくと戦後も五十年が過ぎていた。戦前の民俗社会に成長してきた人たちの多くが、すでに鬼簿に名を連ねてしまつた。これが口承文芸のおかれた現在といえる。認める認めないは別として、口承文芸は衰退、変貌の期にさしかかっている。「変化」は、進化論的な立場からすれば、新たな胎動の始まりという見方もできる。口承文芸がどのように変わろうとしているのか、あるいは現代が口承文芸にとってどのような時代なのか、時代の深部からとらえる必要がある。

調査

学会の使命がアクチュアルな問題に取り組むべきものであるとすれば、この問題は避けて通れない。日本口承文芸研究學會は、ここ数年、口承文芸の現況について、さまざまな角度から取り上げ発言してきた。たとえば会誌の第二十号で「口承文芸研究の課題」という「討論」とそれへのコメントを掲載し、口承文芸の研究の現在と展望を追究した。続く二十一号・二十二号では、「口承文芸の現在」という「小特集」を組み、日本と世界の口承文芸の現状を、現場からの報告という形で総合的にとらえる試みを行なつてゐる。

さて、今回の第二十六回大会のシンポジウムは、こうした流れを受けながらも、これまでの研究や語りの現状分析といった、いわば口承文芸と研究者との関わりや姿勢をダイレクトに問うといった場から離れたん離れ、その前提となるべき調査や資料の面に注目することにした。そこから「衰退、変貌の現在」への新たな視点を見いだすべく意図した。「口承文芸の調査・記録・保存・活用」と題し、テーマ設定としたゆえんである。このテーマを広角かつパースペクティブに掘り下げるために、アイヌや中国、昔語りや現代伝説といった多様な立場からの発言を企図した。以下、当日の報告や議論をふまえながら、「調査」「記録」「保存」「活用」といった項目で議論を整理していきたい。

□承文芸の現在が、「衰退、変貌の期」にあると総括的な言い方をしたが、これには異論もあるだろう。□承文芸が一樣に衰退しているわけではなく、同じ□承文芸の中でも、民謡や俗信、伝説とでは事情が異なるであろうし、また一つのジャンルの中でも内容によつて盛衰の差が違う。

問題を昔話に限つてみても、おおまかには衰退の域にあるとしても、幼稚園や図書館、地域文庫などの語りは盛んであり、その推進役にもなつてゐる語り手たちの会の活動などは活発である。児童文化や教育における「昔話」の必要性はますます高まつてい

る現状がある。先述した「□承文芸研究の課題」の討論の中で、川田順造が、「伝承の危機」に対し、「今まで研究者が求めている伝承がなくなるうとしているのであって、伝承そのものは色々な形で生きつづけるわけで、そこで新しい状況の中での伝承の在り方を考えなければならない」と述べているのは、そうした事情を指したものであろう。伝承のすべてが危機に瀕しているのではない。衰退したのはこれまでの「語りの場」であり、その場が要請していた種類の昔話——すなわち封建的な時代精神の色濃い昔話である。民俗社会の変容に伴い、「伝統的な語り」が喪失しているのでといえる。

しかし、このことは単に社会変動によつて引き起こされた問題だけではない。これまでの昔話研究に内在する問題でもあつた。

社会変動による衰退は、結果としてそうした昔話研究のあり方を照射し、顕在化することになつたのである。

これまでの昔話研究は、伝承基盤に立脚した昔話の採集であり、民俗学的方法に基づく学問研究が中心であった。柳田国男が提唱した昔話研究は、「童話」以前の昔話は神話から派生したものであり、その「固有信仰のまだ活きて働いて居た名残」の昔話を村々から拾い集め、それを基に日本の固有信仰を解明していくことであった。ここには児童の心理や文化としての昔話が看過され、結果として昔話を狭い枠の中に閉じ込めてことになつたのである。こうした偏った昔話研究の呪縛が今になつてようやく解かれ始めたのである。

ところで、こうした問題はすでに民俗の側から指摘されていた。柳田の民俗調査の方法や分類法を丹念に分析した平山和彦は、調査者の必要とする調査の方法や資料の収集を「偏重するあまり、教育論や文化論としての伝承理解を深める作業が手うすになつた」と述べたのは卓見であり、こと昔話においても同様である。昔話を調査者や研究者の視点からではなく、伝承者の立場にたつてまずその意義を追究することである。柳田の引いてきた昔話研究のレールから離れて、新たな枠組みのもとでの昔話研究を摸索するにあたつて、平山のいう「教育論や文化論」としての昔話を、調査の場からどのように引き出してくるかが今後の課題となつてゐる。

## 記録

旧来の枠組みを離れた新たな調査の創出にかかるものとして、今回のシンポジウムで取りあげられたのは、岡部隆志の「中國研究から」と、渡辺節子「現代伝説研究から」の報告である。

岡部は中国少数民族の調査にビデオカメラを導入しての調査記録を紹介した。ビデオカメラという記録ツールは、「従来の、ノート・メモ等による調査資料に比べて圧倒的な情報量を持ち、またデジタル技術による保存、インターネット上の公開等の可能性をさえ持つ」という。調査の現場を時間の流れの中で、逐一テープに収めた映像は、編集を加えなければ緻密な第一次資料として大きな価値を有するものになる。

この丸ごとの記録は、イレギュラーも違った読みを可能にさせるものとして、初心者にも容易に資料採集の現場に向かわせることになるという利点をもつ反面、調査者はディレクターの役割を担うことになり、調査の現場では研究者を保障するものがなくなり、研究者の自立を弱めることにつながっていくという。調査のための「作業仮説」がそのまま分類された資料となるため、結果的に研究を疎外することになる。

しかしそうした欠点はあるとしても、ビデオテープによる第一次資料の公開は、研究者のモラルを問いかず意義をもっている。これまで研究者は調査して手に入れた資料を秘匿し、その一部を切り取つて仮構し、自らの研究成果として公表してきた。調査される側からすれば、資料が公開されて多くの研究者の目に触れ、さまざまな研究に寄与することを望むはずである。資料が特定の

調査者のもとで特権的に扱われることは、時代の趨勢からすれば改めていかなければなるまい。調査とはだれのものか。研究者は、そうした調査、伝承者をめぐる環境の変化に敏感でなければならぬ。平山の言うように、調査者の求める資料ではなく、伝承者を中心とし、資料の機能に留意しながら収集し、それを公正な形で公開していく時代になつてきている。

岡部の報告が調査方法の革新につながるものとすれば、渡辺の報告は調査の対象の拡大にかかわっていく。現代伝説はこれまでの世間話の概念を、現代の都市や現代特有のメディアの領域に広げて補足しようとしている。複雑で無意味に膨張を続ける都市の空間に生まれてきたこの噂話は、主として若者たちの間に流通しているようである。

渡辺はこの種の話を、制限を設けずに広く収集を心がけている。日常のあらゆる機会に耳から入つてくる「言葉」はもちろん、アンケートやインターネット上の「文字」をも射程にして拾つていいく。そして集まつた雑多な話を「不思議な世界を考える会」の会報に隨時掲載していくことにしている。貪欲なまでに、記録にこだわつてゐるのである。こうして集めた現代伝説を次にどのように分類していくかが、次の課題であろう。現段階では、タイプインデックス化に踏み出していないようだが、早晚進めていかなければならぬところにきている。

ところで、問題も多くある。まず話の収集に際して、何を基準に選定するのかということがある。そのことは話のニュースソー

ス性にもかかわってくる。非オーラルな、たとえばネット上の出所不明の「文字」には、個人の創作の可能性のものもあり、それをどのようにして弁別するのかということもある。さらには現代伝説がこれまでの伝承的説話とどのように関係するのか、などといつた問い合わせある。

しかし、こうした疑問はすべて従来の世間話の枠組みに基づいたところからの発想であり、したがってその枠組みに沿って納得されるような答えを出すことは困難であろう。クリアしなければならない課題はいろいろあるが、現代伝説とは何か、という定義を新たな枠組みで作り出していくことが、いま必要なことでもある。

ばならない。いやそれは、単に研究のためばかりではなく、教育や生活の一部に取り入れ享受していくことをも視野に入れておかなければならぬ。いうなら研究者がメディアとして人類の共有財産としての口承資料を一般の人々に提供していくことである。そのためにも口承資料のまま保存していくことを進めていかなければならぬ。昨今の技術文化の発達はこうした問題をも乗り越えていくことを可能にしている。

戦後、昔話研究が盛んになり、その際テープレコーダーを用いて録音したオープンリールやカセットテープの量は膨大なものであつたろう。しかし今日そうしたテープ類の劣化が激しく、このままでは保存が難しくなりつつある。当学会の会長である常光徹は『伝え』の二十九号に「資料の保存と活用」という文を寄せ、保存の問題にふれている。「会員の樋口淳氏を中心とした日本民話データベース作成委員会（略称JFDB）が組織され、科学研究費補助金を受けてアナログデータのデジタル化に着手することになつたのは朗報である。「貴重なアナログデータをデジタル化することではほぼ永久的な保存が可能になるだけでなく、分類整理して将来はできるかぎり公開をし、研究の発展に寄与することを目的としている。こうした仕事はすでに沖縄国際大学の遠藤研究室が、沖縄口承説話データベース事務局を中心に取り組み、成果の一部をCD-ROM（沖縄の民話1）で公開している。パーソナル・ユーズのコンピューターの普及によつて、多量のデジタル情報を処理することが誰にでもできるようになつた現在、これまで個人

的に管理されてきた情報を大学、学会、博物館などの公的機関においてデータベースとして整理しなおし、広く利用できる道を拓くべきとききにきているように思われる。」と述べている。同感である。ぜひともデータベース化を完成させていかなければならぬ。

それにあたつて大事なことは、データのすべてを公開し、まただれもが共有化できるよう、そして簡便な利用が可能なシステムを作りあげることである。ちなみに先の「日本民話データベース作成委員会」のインターネットのホームページ (<http://www1.isc.senshu-u.ac.jp/~thb0309/MinwaDB/IndexMinwaDB.html>) には録音したテープの語りが聞けるようになっている。アクセスしてみるとお薦めする。

## 活用

最近、□承文藝學会や日本昔話學会の大会に、一般の主婦の参加が目立つようになつた。學會が大學の教員や研究者の特權ではなくなりつゝあり、歓迎すべきことである。ただ一般的の主婦といつても「語り」の実践にかかわっていることが多く、昔話の語りや、子どもの心理・文化に興味を持つ人たちである。こうした背景には、「幼稚園や図書館、地域文庫などの語り」やストーリー・テリングの隆盛があり<sup>(6)</sup>、昔話に対する社會認識に変化が生じてきているように思われる。

昔話が子どもの想像力の発達に大きな役割を果たしていることについては、心理学の世界でさまざまに説かれてきた。「物語」ということは、物語りたいという意志と、それを実現するための想像力を中心にした人間の認識全体に支えられた、豊かで、しかも複雑な営みなのである。<sup>(7)</sup>と、内田伸子は認知心理学の立場から述べている。また、子どもの物語りの能力が五歳から六歳にかけて質的变化を遂げることを指摘している。昔話の語り手たちが小学校入学するころに一番昔話をよく聞いたと述べることと通底しているように思われる。昔話を子どもの視点からとらえていくことは、すぐれて現代的テーマである。子どもの感性や心は自然に開発されるものではなく、物語や昔話などの体験を通して発達していく人間的資質であることはいうまでもない。そうした認識は語りにかかる人々に共通のものである。

□承文藝の「活用」ということですぐに思いつくのは「地域起いし」であろう。武田正「昔話研究から」はこの問題を取り上げている。山形県南陽市の「夕鶴の里」では観光客に昔話をサービスに語っている。その現状における問題点を指摘しながら、「団炬裏端の語りの原点」に返つてみる必要性を訴えている。行政サイドの地域起こしと文化としての昔話とのズレをどのように克服していくのか、昔話の現代的再生の困難さをうかがわせる報告であつた。『遠野物語』のお膝元の岩手県遠野市では、早くから觀光の場の語りを実践してきた。実情を紹介する余裕はないが、川森博司は語り手の側から、その語りを「文化の再創造過程」とボ

ジティブにとらえているのは期待が持てる。

中川裕「アイヌの研究から」は、口承文芸が消滅の危機にある「言語復興運動」に重要な役割を果たしていることを取り上げた。「アイヌ弁論大会」と称するプロジェクトでは口承文芸の暗唱が大きな核になっている。そのような場で小中学生が活躍している点も見逃せない点がある。<sup>⑨</sup>として、その実例を報告した。長い口承を経てきた口承文芸には、言語の魅力が集約されているのである。それは日本の口承の語りについても同様であろう。祖先から送り届けられた民族の財産である「語り」に対する自覚を持ち、確かに後世に引き継いでいくのは、いま口承にかかる者の使命と責任でもある。

### 注

- (1) 狹い体験ながら、学生時代にいま記録しておかなければ永遠に失われるという使命感で昔話調査していた頃から三十年が経ち、いよいよその現実に遭遇してしまった。
- (2) 柳田国男「桃太郎の誕生」『定本柳田國男集』第八巻、筑摩書房
- (3) 平山和彦「伝承の理論的考察」『伝承と慣習の論理』吉川弘文館、平成十四年
- (4) 第二十六回口承文藝學会大会の「シンポジウム要旨」による。

(5) 「伝え」(第二十九号、日本口承文藝學會会報、二〇〇一年)

(6) 松岡享子「現代のストーリーテリング—図書館における昔話の語りー」(日本昔話研究集成3『昔話と民俗』名著出版版、昭和五十九年)、櫻井美紀「口演童話から語り手運動まで」(岩波講座『日本文学史 口承文学2・アイヌ文学』第十七巻、岩波書店、一九九七)

(7) 『ごっこからファンタジーへ 子どもの創造世界』(新曜社、昭和六十一年)

(8) 『日本昔話の構造と語り手』(大阪大学出版会、一〇〇〇年)

(9) 注(4)「シンポジウム要旨」による。

(はなべ・ひでお／國學院大學)